

行政支援の穴 埋める

看護婦が、美容師が、学生が……立ち上がった



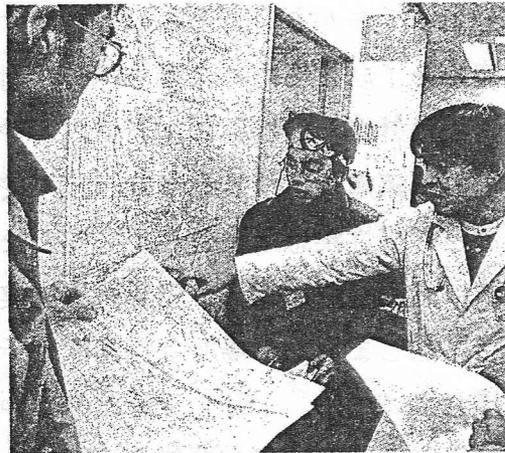
神戸市長田区で(上)

阪神大震災の残した傷あとから、立ち上がった。支援者の支援に、ボランティアたちが奔走している。学生がいる。勤め人がいる。主婦もいる……。駆けつけた人たちは被災地を何を見て、どう動き、どんな思いを抱いているのか。まずは大きな被害のあった地域の一つ、神戸市長田区で、ボランティアたちの姿を追ってみた。



区役所の窓口は一週間後

夜十一時すぎ、看護婦の塩 滲をしている。京都の病院から谷文さん(三三)は工業高校の門から夜勤明けの足で電車に乗をくぐった。目指す食塩ホールでは、六十人ほどが避難生 療ボランティアのグループに



どこを回って、どんな物資を届けるか。地図の前で打ち合わせをする、学生や医師らのボランティア

合流した日、出番がきた。六十九歳になるという女性

深い、行き先が決まるまで世話をすることにした。

に歩み寄った。夫とともに被災、その夫は亡くなったときいている。そばに置いた手押し車のかごに、遺物を納めた箱があった。気が衰えたのか、起き上がるとはしな

塩谷さんは、使い捨てカイロを毛布の下に敷いて、おむつを交換する。夜明けまで女性と二階に過ごした。

自主的に巡回していた医療グループが、この女性に気付いたのは、その前日の二十七日のことだった。水が不足せめて唇を湿らせると、ウエットティッシュを口にあてていた。看護婦が三交代で付き

「せきが出て寝付けないようでした。ほかにも弱っているお年寄りが三人いて、このまま寝たきりにならないよう、注意しなければ……」

衛生面が心配な避難生活、医療ボランティアが巡回健診に活躍する。いずれも神戸市長田区役所で

次の昼、校舎の前で豚汁の炊き出しがあった。大阪市のキャンプ愛好家たちが、材料とガスボンベを持参した。十人ほどのボランティアがおわんによそい、中に運んだ。震災後、この避難所で配られた初めての温かい食事だった。

だが、行政の目や手が十分に届かないエリアポケットのような地域が、あちこちにあり避難所でも、所によって届く品が偏り、毎日の食事の回数が変わったりする。それを調整し、きめ細かく穴を埋めていく作業は、いまだこのボランティア頼みだ。しかし、つい最近まではボランティアの受け入れすら、混乱が続いていた。

◇

小学校の避難所で、ボランティアのリーダーを務める美容師長尾敏野さん(三三)は、地元住民だ。壊れた美容師をそのままに、母校に駆け付け、荷物運びから給水の手伝いまで、何でもやった。人手はいくらでもはなかった。混乱した役所を通ず直接協力を正解だったと思えます。

区役所にボランティアが集まり始めたのは、被災後初めて迎えた週末になってからだった。

東京都内の中学五年生、矢端謙介さん(三三)は、「カンボジアのでもって学校をつくる会の仲間と一緒に二十一日、船でやってきた。先遣隊が、兵庫県の東側に比べる」と、長田にいるボランティアは十分の一だと知らせてきたからだ。

「さうい、海外の援助活動で交流があった医師らのグループ「AMDA」が、区役所

の中に拠点を構えて、保健所の要請で診療を始めていた。「僕たちは災害援助は初めて。医療チームの手足になる」と最近では自転車で走り回った。情報収集から始めたんです」と矢端さん。

避難所では何か不足はないかを聞き、道で出会った人には近くに寝たきりの人はいないか、役所のリストにない避難所はないかと尋ね歩いた。

区は約八十の避難所に、運送業者の協力を受けて物資を送っていたが、被災者の声を集める余裕はなかった。矢端さんたちは、集めた情報をリストにして区に渡した。欲しい物、余っている物、感じたいことを書き込める専用の用紙もつくった。

「人手はほしい。ボランティアの申し出があったら、ぜひ協力していきたいと思います」

矢端さんがそう話していた二十五日、区役所の窓口が急ごしらえのボランティアの登録用紙が置かれた。ようやく受け皿ができ、本格的な動きが始まった。

地獄から一週間が過ぎた。